日本統一運動News Letter
Japan Unification Movement News Letter
制作／世界平和統一家庭連合・広報局
（旧 世界基督教統一神霊協会）

VISION 2020

真の父母様の愛の軌跡たどる特別研修ツアー

年の瀬も迫った12月10日、真の父母様の特別の招待を受けて日本の責任者26人が東京を飛び立ちました。宋龍天（ソンヨンチョン）・全国祝福家庭総連合会総会長ご夫妻と、李成萬（イソンマン）企画本部長は、韓国でお母様と合流し、ラスベガス入り。他のメンバー23人は徳野英治会長を団長に、ロサンゼルス経由でラスベガスに向かいました。

「青い羊の年」2015年は、真のお父様の聖和3周年記念式典を日本が担当し見事に成功。また統一教会から家庭連合に名称変更をするなど、日本統一運動において飛躍と恩恵の年でした。そんな日本の責任者にとって、この度のラスベガス特別研修ツアーは、天から慰労・激励され、新たな出発をする尊いひと時となりました。（報告　広報局長　鴨野 守）

◇　◇　◇

真夏は50度を超え、冬はマイナス10度以下になる砂漠の地に出現した200万が住む人工都市・ラスベガス。年間4000万人の人々が訪れます。

晩年の真のお父様は、快楽と欲望渦巻く“Sin City（シン シティ）”（罪の都市）を“Shine City（シャイン シティ）”（輝く都市）に変えようとこの地で精誠を投入。通称「ピースパレス」と呼ばれるラスベガスの「国際平和教育院」（IPEC）も、真のお父様が構想されたもので、お父様の聖和後、その遺志を真のお母様が相続されて今年5月、完成に至りました。

お父様の愛された地を愛される真のお母様。そのような父母様の愛の軌跡の一端に触れることを願い、日本、韓国、アメリカの指導者86人が集まりました。

12月11日朝の訓読会のあと、朝食を済ませた一行は、午前8時半過ぎに到着された真のお母様と、車で約30分のレッドロックキャニオンに向かいました。快晴に恵まれ、冬の透明な青空が広がっていました。

1100m以上の高地を吹き渡る風が思いのほか冷たかったですが、レンガ色をした岩肌の山々など独特の景観が訪問者を圧倒してやみません。

この自然公園で、人々はロッククライミングや、乗馬、ランニング、サイクリング、キャンプなど思い思いの時間を過ごすのです。急峻な岩肌を見ていると、そこに張り付き、懸命によじ登る人間の知恵と技術と勇気を見たい、天の父母様（神様）の眼差しを感じます。

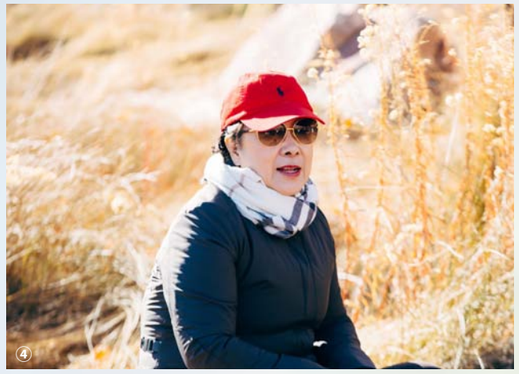
（3面に続く）

ラスベガスに日韓米の責任者86人が集結

①

②

③


④

⑤

⑥

⑦

⑧

①「真の家庭の価値運動20周年記念式」でみ言を語られる真のお母様　②真のお母様のみ言を聴く参加者　③真のお母様に拍手を送る日本の責任者　④レッドロックキャニオンで　⑤歌を披露する宋龍天総会長（左）　⑥お母様に報告をする徳野英治会長　⑦天和宮で日韓米の責任者と時を過ごされる真のお母様　⑧日本から参加した責任者

真のお母様は、この公園の一角にある「レッドスプリング」で下車。お気に入りの散策コースに向かわれました。赤い帽子にマフラー、薄茶色のダウンコートのお母様は、途中、私たちとともに記念写真を撮る機会を設けて下さいました。

さらに奥に歩くこと数分。日本、韓国のメンバーが集合すると、「バウンス」のメロディに合わせて、足を高く動かす運動をしました。これは、お母様の健康法の一つです。お母様は言われます。「今、私は健康管理に努力しています。（真の父母として）行くべき道は遠く、すべてを勝利して霊界にいかないといけません。みなさんも健康で長生きしてください」

そして、数人が呼ばれて歌を披露。真の父母様と同じ時間、同じ場所で、同じ歌を歌ったひととき。だが、それだけで終わりません。私たちはどこにいても、人種・国境を超えて、事情、心情、そして同じ夢を抱く「家族」です。この場所が真の父母様と兄弟がともに過した思い出の地となった瞬間でした。

ランチタイムで真の父母様とブラジル料理を堪能したあと、市内観光に向かいました。地上252メートルの展望台で一行は、足元に広がるラスベガスの街並みに驚嘆。一方、前方の空にかかる鮮やかな虹に、良い予感を覚えました。

◇　◇　◇

12月12日午前10時、ピースパレスの講堂に約700人が集い、「真の家庭の価値運動20周年記念式」が開催されました。この運動の一環として、真の父母様が1996年、真の家庭の価値を回復するセミナーを開催され、米国の聖職者5000人が受講、米国に良き影響を与えてきた実績を持ちます。

式の冒頭、真のお母様がケーキに入刀、記念品の授与がなされました。続いて、米国聖職者会議（ＡＣＬＣ）共同議長、ジョージ・スターリングス大司教が真の父母様がアメリカに投入された真の愛に対する感謝の報告祈祷。

金起勲（キムギフン）北米大陸会長は、20年前に真のお父様が指示された当時の様子を振り返りながら、「お父様はいつも、宗教指導者の責任の重さを指摘してくださいました。イスラムのテロが相次ぐ中、なさなければならない責任を果たすために私たちはこの場に来ました」と挨拶。

続いて、趙誠一（チョソンイル）世界本部長が、真のお父様の聖和以降の3年の間に、お母様がなされた①３大経典の発行②天一国の憲法制定③基元節の宣布④鮮鶴平和賞の制定に言及。「これこそ、真のお母様が私たちに示して下さった精誠の結実であり、計り知れない恩恵なのです」と、感謝を述べました。

続いて、尹ヨンホ副室長が、鮮鶴平和賞委員会の洪一植（ホンイルシク）委員長（韓国・高麗大学元総長）のネパール訪問について報告。ビドヤ・デビ・バンダリ大統領が、同行したヨン・チョンシク・アジア大陸会長に対し、地震の際のお母様からの義捐金に謝意を表明したのを受け、ヨン大陸会長が真の父母様の業績を証すと、大統領をはじめ、副大統領、首相、国会議長、国会副議長が相次いで平和大使になるという驚くべき出来事が起こりました。ヨン副室長が「これは天の役事であり、奇跡です」と語ると、会場からは大きな拍手が起きました。

続いて、文妍娥（ムンヨナ）様が、お母様のみ言を代読。天の父母様のみ意によって建国されたアメリカの歴史を振り返った上で、アメリカ建国の背景にあるキリスト教理想について「天の父母様を中心とした、一つの家族を成すことでした。天が準備した独り子と独り娘が聖婚し、家庭、氏族、民族、国家、世界を成し、本然の創造理想を完成することでした」と強調されました。

一方、お母様は「（真の父母としての）私たち生涯の目標はただ一つでした。天の父母様を解放してさしあげ、失った父母の位置を再び捜し出し、死亡圏で苦しむ無知蒙昧な人類を救い、天の父母様の懐に返してさしあげることでした」と説明。最後に、「私たちの天の父母様のために立ち上がりましょう。失った放蕩息子を探す父母の心情で、6000年の全人類歴史において、失った子女たちだけを身を焦がして探してこられた私たちの天の父母様のために立ち上がりましょう」と呼び掛けられました。

最後にお母様が登壇。「皆様は再臨主と出会い、真のオリーブの木に接ぎ木された立場であり、堕落とは関係がありません。皆さまが受けた天の祝福を家庭次元にとどめず、70億人類に伝える責任を果たして下さい」と、神氏族メシヤの責任遂行を強く呼びかけられました。

レーガン、ブッシュ大統領時代に中東の大使を務めたことのある元外交官は、大会に参加した感想を聞かれ、「中東の大使を務めたことよりも、一番貴いことはお母様から平和大使の任命を頂いたことです」と、真の父母様に侍る価値の尊さに言及しました。

午後は、天和宮に舞台を移し、ユンノリ大会を開催。日本、韓国、アメリカ、警護チームの４グループで熱戦が展開され見事、日本チームが優勝。あるアメリカの幹部が「徳野会長が大声で、『ウリヌンハナダ、イルボンハナダ』と叫んだ、その精神が良かったのでは」と語っていたのが印象的でした。

表彰式では、日本メンバーが数十回は練習を重ねた「ムジョッコン（無条件）」「クノメサラン（あいつの愛）」「サランチャジャインセウルチャジャ（愛を探し、人生を探し）」を真の父母様の前で熱唱しました。

ラスベガス滞在中、参加者たちは真の父母様から大切な天のみ言をいただくともに、温かなまなざしの中で、貴重な時間を過ごしました。食事や買い物、ユンノリ大会、歌の披露、映画やショーの鑑賞――数日のラスベガス特別研修ツアーは、参加した一人ひとりの心に永遠に刻まれた思い出となりました。

真のお母様のみ言

“終末には真が現れなければならない”

2015年12月12日、米国・ラスベガス 国際平和教育院

以下のみ言は、12月12日、米国・ラスベガスの国際平和教育院（IPEC）で行われた「真の家庭の価値運動20周年記念式」で、真のお母様が語られた内容を翻訳し、整理したものです。

＊　　＊　　＊

私に会いたかったですか？（はい）照明が強すぎるので、サングラスをかけます。

毎年12月、特にキリスト教の基盤であるアメリカでクリスマスをどのように考えているのかとても気になります。皆さんに一つお伺いします。準備された周辺の人々が責任を果たせないことによって、イエス様はやむなく十字架にかからざるを得ないことを悟られ、弟子たちを集めて「最後の晩餐」を開かれましたね？その時のメニューが何だったでしょうか？ここにいらっしゃる有名な牧師たちはご存知でしょうか？

15世紀にレオナルド・ダ・ビンチが「最後の晩餐」を描いたのですが、その後、長き歳月の中で、それがかなり破損しました。それを20年もかけて修復したのですが、「最後の晩餐」のメニューが何であったかを見ると、結論は魚料理でした。ローマ時代にクリスチャンたちが迫害を受けながら暗号で書かれたものが魚でしょう？それをたくさん表現しました。文明の発達を見ても魚が多くの貢献をしました。

それでは、私たちは聖書にあるイエス様の奇跡の内の一つである「五餅二魚（5つのパンと2匹の魚を増やし、5千人のおなかを満たしたというキリストの奇跡）」（マタイ14章19～21節）についてもう一度（考えて見ましょう）。どのようにして、（5つのパンと）2匹の魚で5千人が食べたのでしょうか？

中東地域は夏が長いでしょう。川や海で捕まえた魚はすぐに食べなければ腐ってしまいます。（それで）何の技術が発達したでしょうか？塩蔵技術です！その時、イエス様が使われた2匹の魚は塩蔵魚であったのです。塩漬けの魚であったということができます。これをキリスト教文化圏でどのように説明をしていたのかは分かりませんが、（そう考えることが）可能です。そうでしょう？塩に漬けた魚はひとかけらだけでも複数の人々が食べることができるでしょう？

真実を知るべき時

このように考えてみる時、真実を明かにする時になりました。今日のキリスト教文化圏が再臨のメシヤを待ってきましたが、その方が来て何をするのかは分かりませんでした。ただ信じてついて行けば天国に行くと、簡単に（考えていたのです）。韓国のことわざに「スイカの皮をなめる」というものがあります。夏にスイカの皮だけをなめていては、そのさわやかな味を知ることができません。割ってみなければなりません。今のキリスト教文化圏は（スイカを）割る、真実を知ろうとするそのような進展がありませんでした。

聖母マリヤをみても、霊的な役事によりイエス様を懐妊した立場でしたが、その時、その周辺の環境は、（そのことを）明かすことが本当に難しい環境であったということを皆さんは、聖書を通して知っているでしょう。しかし、イエス様が33年の生涯路程を経るまで、マリヤが母としての責任を果たせましたか、果たせませんでしたか？どうして、独り子イエス・キリストとしてこられたイエス様が、33歳になるまで（結婚できず）一人で辛い人生を歩みながら、亡くなられるしかなかったのでしょうか？本当に気がふさがるような悲しい話です。

クリスマスを考えてみても、本来（12月25日は）イエス様の誕生日ではありません。どうして、多くの歳月を経ながらも、一言でも真実を明かすことのできる人がいなかったのでしょうか？余りにも残念なことです。そのように、天の夢があり、願いがあったのに…。個人から家庭、氏族、民族まで導いてこられるまで、いかに難しいとしても、なぜ4000年もかかったでしょうか？その4000年が33年で再び水泡に帰すしかなかったとき、天の父母様の心情はいかばかりだったでしょうか？イエス様ご自身はどうだったでしょうか？父母の前に孝行できなかった、孝子の立場に立つことができなかったことがどれだけ辛かったでしょうか？皆さん、想像できますか？内なる事情を知らないまま、「スイカの皮をなめる」ような信仰をしてきたのが2000年のキリスト教歴史です。

今日の皆さんは、違わなければなりません。皆さんは真の父母に出会いました。真の父母から祝福を受けました。皆さんは、野生のオリーブの木ではなく、真のオリーブの木です。この言葉は、皆さんはサタンと関係のない立場にいるということです。それならば、皆さんは自分だけがそのような立場にいても良いのでしょうか？天の父母様の願い、真の父母様の願いは、70億人類を天の父母様の子女として祝福してあげようというものです。分かりましたか？この真実を知るならば、今日の人類がどのようになるでしょうか？一つに集まるでしょう。そのようになれば、自動的に一つの世界、地上天国はなすことができます。分かりましたか？（はい）

祝福家庭としての使命

ところで、祝福された皆さん、先に召命を受けた牧師たちには責任があります。この責任は真の父母様が代わりにしてあげることができません。皆さんがしなくてはなりません。真の父母様がすべて見せてあげ、実践して勝利的基盤を築いてくださったので、皆さんはそのままそれに従って責任を果たせばよいのです。

今日、全世界的に起こっている多くの事件、天災地変――。知っている私たちが克服していけるよう教育しなければなりません。そのため、韓国でも、日本でも、アメリカでも、一つとなってこの問題を解決していくことのできる教育を続けていくのが、氏族メシヤの責任であるということを重ねて言います。（真の父母を）知らせなければなりません。真の父母と同時代圏を生きているにもかかわらず、知らなかったという人がいてはなりません。そうしてこそ、皆さんも永遠の世界において自由を享受することができます。

ここに今日、1200人ほどが集まったといいますが、この人たちがきょう決心して、神氏族メシヤの責任である430双を皆完遂したならば、どのようになるでしょうか？この国がどのようになるでしょうか？この国に天の父母様がかけられた大きな夢があったでしょう。しかし、200余年の歳月を経て、その精誠は乏しいものとなってしまいました。

先ほどもみ言で、神様がこの国にこれ以上希望を持つことができないので、去るしかないというみ言がありましたね？けれども、真の父母様はこの民族を再び悟らせて、神様が祝福された本来の責任を果たすこの国、世界を抱くことのできるこの国となるように願いながら、ここで一生の半分以上の間、精誠を注がれたのです。しかし、（この国は）多くの過ちを犯しました。いまだにキリスト教基盤においては再臨のメシヤを待ち続けており、すでに再臨のメシヤが来られ、真の父母として摂理の一ページをめくったのに、旧約、新約時代の生活を送っているのが、今日のキリスト教の現実です。

父母様と共に人類の願いを果たそう

私たちは21世紀を生きているこの時代において変わらなければなりません。先ほども言いましたが、終末には真が現れなければなりません。真実が現れなければなりません。天の父母様と真の父母様の願いが人類の願いであるのにもかかわらず、そこに躓きの石となる無知なる宗教者や、民族がいてはいけません。彼らを教育しなければなりません。そのことが今日、真の父母様が皆さんに今一度強調し、懇切に願うことです。特に、12月はイエス様の生涯について多くのことを考えるようになりますが、今日の皆さんは、イエス様の時代において人々が責任を果たせなかったことを蕩減復帰して、勝利した位置に立つべき立場です。それが今日、この国のACLCを主導している中心牧師たちの責任であることを、今一度肝に銘じてくださることを願います。

それゆえ、私は2020年までに、人類の前に永遠な聖地となることのできる清平に何を作るといいましたか？「天地鮮鶴苑」をつくります。皆さんが、この時代に真の父母様と共にしたというその実績を、未来の人類の前に見せてあげることのできる環境を作ろうと思います。

そのように考えると、毎日毎日の生活が感謝です。幸せです。体は疲れていても、私（真の父母）によって天の父母様の願い、人類の願いをなしてあげる事のできる環境圏を作り出すことができる。皆さん、皆さんも私（真の父母）と共に同参しますか？皆さんの苦労と責任が、その日を早める日々になることをもう一度お願い致します。

「心の書写」を通じて恩恵が拡大

各地で大規模な書写大会・礼拝を開催

①群馬教区で行われた「心の書写」クリスマスフェスティバル　②講話を行う浅川勇夫先生（群馬教区）　③会場を盛り上げた笠原さん親子の演奏（群馬教区）　④家庭書写会を行う家庭（川崎家庭教会）　⑤数家庭で行う家庭書写会に集まったメンバー（同）　⑥川崎家庭教会で行われた書写礼拝　⑦書写礼拝の会場で書写を行う参加者（同）　⑧親子で書写（鳥取家庭教会）　⑨街角で書写を勧める「立ち書写」（福岡教区）

慌ただしい師走の12月、「書写大会」や「書写礼拝」が全国各地で開催され、真のお父様の自叙伝『平和を愛する世界人として』の書写を通じた伝道の輪が広がっています。中には一つの教会で参加者が1000人を超える集会もあり、家族や親族、友人知人などから多くの新規参加者が集い、書写の体験と恩恵を分かち合い、様々な証しも生まれています。

■全国各地で書写大会・礼拝

12月13日、群馬県藤岡市内の会場で「幸せを呼ぶ自叙伝心の書写 クリスマスフェスティバル」が行われ、新規・再復帰の575人を含む1325人が参加しました。

開会に先立ち、前橋在住の笠原敏樹さん親子などが、「クリスマスメドレー」ほか2曲を披露し、会場を盛り上げました。

自叙伝「心の書写」の映像を放映した後、埼玉県本庄市の青木久美子さんと娘、孫の家族三代が登壇、書写の実践を通じて、娘夫婦の仲が良くなり、不登校の孫が元気に立ち直ったという証しを披露。多くの参加者が感動し、涙を流しながら話に聞き入っていました。

講師の浅川勇男先生は特別記念メッセージで、真のお父様の考え方や生き様を証ししながら、書写の実践を通じて、お父様の精神を“私”の心に書き写す行為が「自叙伝心の書写」であると強調しました。

その後、サンタクロースが登場し、子供たち一人ひとりにプレゼントを渡すと、子供たちは大喜び。第2部では、群馬教区の聖歌隊「ティアーズ」が素晴らしいハーモニーで2曲を歌い上げ、壮年部の「群馬ファーザーズ」が、力強く感動的な歌声を披露しました。

最後は、会場全体でペンライトを持って「清しこの夜」を合唱、感動的なフィナーレとなりました。

このような書写大会や書写礼拝が現在、全国各地で行われています。

■み言を生活で実践

「書写」とは、真のお父様の自叙伝の一節を用紙に書き写すことですが、それを「心の書写」と呼ぶのは、自叙伝のみ言を書き写すことを通して、お父様の“愛の心”を自分の心に書き写そうとするからです。

日本では古くから、仏教の経典を書き写す「写経」が行われてきました。今日でも、小中学校などで「習字」や「書道」などが一般的に行われています。

「心の書写」では最近、「家庭書写会」を試みるようになっています。一つの家庭に友人知人が集まり、少人数での交流を通して心情的な絆が育まれ、お年寄りから子供まで、家族そろって書写を実践する動きが広がっています。

また、書写と共に行う「愛天愛人愛国の生活指導」では、朝晩の挨拶から心の持ち方など、具体的な生活習慣や言葉遣いなどをチェックする自己啓発を実施。こうした試みからも多くの証しが挙がっています。

「夫の酒乱と暴力に耐えきれず離婚して、何十年も怨み続けていた婦人が、書写で怨みが溶けて、その夫と再婚し円満な家庭を築いた」「どうしても娘を愛せなかった母親が、書写を通して、心から娘を愛せるようになった」といった証しも出ています。

そのような恩恵に浴した人たちが必ずといってよいほど語る言葉があります。

「今まで、相手が悪いと決め付けてきましたが、自分の愛の不足に気づかせていただきました。自分が変われば相手も変わるんですね」（浅川勇男著『文鮮明師自叙伝に学ぶ 心の書写』）

自叙伝書写とは単なる伝道のツールではなく、信仰者として内的に成長することで、結果として伝道の推進に結び付いていることがよく分かります。

■大規模「書写大会」で心情文化発信

書写をする個人や家庭が増える中、書写実践を通じた証しや恩恵を分かち合う場として、「書写大会」や「書写礼拝」が教会以外の会場でも行われるようになっています。

そこでは改めて「心の書写」の意義と価値を学ぶとともに、真のお父様の教えの根本である「統一原理」を紹介するプログラムを取り入れた集会も増えています。

また、節目となる時期には、「ファミリーフェスティバル」や「クリスマス集会」などが、教会の礼拝を兼ねたイベントとして企画されています。

そうしたイベントでは、エンターテインメントとして、教会の聖歌隊や青年部、壮年婦人部によるコーラスのほか、ダンスや劇、さらには地域色豊かな出し物を披露。教会員ではない家族や親族、隣近所の知り合いも参加しやすいプログラムを準備して、家庭連合の“心情文化”を発信する場にもなっています。

冒頭で紹介した群馬教区の書写大会がその一例で、大規模なイベントが各地で行われるようになっています。

最近では、11月22日に東神奈川教区川崎家庭教会が1000人を集めて書写礼拝フェスティバルを開催。12月に入ってからは、群馬大会のほか、1000人以上が参加した大規模な書写大会は、鳥取の1000人書写礼拝（20日、鳥取家庭教会）、宮城の1000人書写大会（23日、仙台家庭教会）、西北東京の1300人書写大会（24日、板橋区内の会場）、岡山の1000人書写礼拝（27日、岡山家庭教会）などが行われています。

このほか、先駆けて書写伝道を進めてきた福岡家庭教会では、今年9月には書写会員が12000人を突破。「心の書写」を通じた基盤が着実に拡大する1年となりました。

“天と後孫に誇れる実績を立てよう！”

第３回「合同追慕礼拝」を開催

①

③

②

①花で彩られた祭壇
②記念説教を行う徳野英治会長
③献花を行うご遺族

12月17日午前10時半から、東京・渋谷の松濤本部において、教会の発展に多大な貢献をした先輩家庭を偲ぶ「合同追慕礼拝」が行われました。

今回で３回目となった合同追慕礼拝は、久保木修己日本統一教会初代会長、櫻井設雄第５代会長、石井光治第６代会長、梶栗玄太郎第12代会長のほか、三役事の松本道子役事、金成治子役事、林信子役事、43双祝福家庭の大山高誉・方美先生ご夫妻の９人の歩みを振り返り、天の父母様と真の父母様の願いである「神氏族メシヤ」の使命勝利を決意する貴重な時間となりました。

矢野治佳総務局長の司会ではじまった追慕礼拝は、主礼の徳野英治会長ご夫妻による聖燭点火、田中富広副会長の代表報告祈祷の後、９人の先輩家庭を偲ぶ映像が上映されました。

主礼による献花の後、司会が天一国経典『真の父母経』のみ言「勝利された真のお母様」の一節を訓読しました。

次に、徳野会長が記念説教で、米国・ラスベガスの「国際平和教育院」（通称：ピースパレス）で行われた「真の家庭の価値運動20周年記念式」と日韓米指導者集会の様子を報告。

その上で、真のお母様のみ言のポイントとして、①摂理歴史における女性の役割の重要性、②世界70億人類に真の父母様のご聖誕日を伝えること、③韓国の先輩家庭に対して「天と後孫の前に誇れる実績をつくって地上生活を全うしなさい」と語られたこと――を紹介しました。

さらに、訓読した天一国経典『真の父母経』のみ言の一節に改めて言及しながら、「真のお父様は『真のお母様の勝利によって、復帰摂理を完成、完結、完了することができた』と語られ、真のお母様の勝利について『無私こそが勝利の鍵』であったことを強調されました。私たちが真の父母様との完全一体化を成し、神氏族メシヤの使命を完遂してこそ、救国救世の道が開かれるのです」と訴えました。

徳野会長が祝祷を行い、それぞれの聖和家庭の代表が参列者に感謝の言葉を述べた後、飯野貞夫特別巡回師のリードによる億万歳四唱で、追慕礼拝は幕を閉じました。

真の父母様の愛と天運を共有

第１地区「冬の大讃美・原理大復興会」に1000人

①

②

③

④

①講演する阿部美樹院長
②文孝進様の楽曲を披露する合唱隊
③「ジョイ・トゥーザワールド」を歌う青年の聖歌隊
④会場を盛り上げたトナカイの着ぐるみ

「世界平和は真の家庭から」のテーマのもと、「第19回冬の大讃美・原理大復興会」が12月７日、札幌市内のホールで開催され、新規のゲストおよそ200人を含む約1000人が参加しました。

大讃美原理大復興会は2011年に始まって以来、４年が経過。讃美とみ言を通じて、価値観の転換と善なる霊界協助の基台づくり、そして伝道対象者の教育を目的に、年４回行ってきました。普段は教会の礼拝で讃美している北海道の15の聖歌隊が集まり、聖歌や讃美歌のほか、クラシック、ポップス、オリジナル曲などの讃美を通して、神様、真の父母様、イエス様を称えてきました。

復興会は、オープニングで着ぐるみのトナカイが登場すると、会場はクリスマスの雰囲気に一変。家族をテーマとした曲を讃美し、親孝行の基準を立てられた文孝進様の楽曲をバンドや合唱アレンジで演奏しました。

阿部美樹教会成長研究院長の講演では、「人生を作る幸せ言葉」と題してコミュニケーションにおける言葉の選び方の重要性を解説。「口癖は心の鏡である」という内容に多くの参加者が共感していました。また毎日音読することが脳の活性化と健康につながること、真理のみ言を訓読し実践することの大切さを強調、新規の参加者も話に引き込まれ熱心に耳を傾けていました。

後半では真の父母様を讃美する曲が演奏され、会場全体が真の父母様の愛と天運で一つになる恩恵に満たされました。

途中、司会とトナカイのコントを交えたトークショーなどもあり、演奏曲も日本語、韓国語、英語、ラテン語の４カ国語と非常に国際色豊かに。最後は、億万歳四唱に合わせて天井からクリスマスプレゼントの風船が降ってくる演出で、終始和やかな雰囲気の中でイベントは幕を閉じました。

大讃美原理大復興会の式次第には、敬拝、家庭盟誓、報告祈祷なども織り込まれ、内容的にはほとんど礼拝と同じようなプログラムになっていますが、新規の参加者もスムーズに讃美礼拝のプログラムに引き込まれるケースが多く、リピーターも多くなっています。

今後も天の父母様と真の父母様を堂々と明かし讃美しながら、原理のみ言を多くの人に伝え、真の家庭運動と祝福を力強く推進していく方針です。

参加者からは「トナカイのルドルフ君が可愛かったです。孝進様の曲は不思議で、邪気を払うというか、波動がすごかったです」、「孝進様の曲のときは、言葉では言い尽くせない孝進様の真の父母様に対する思いと、それを『分かっているよ』と優しい眼差しで見つめておられる父母様の姿を感じ、そのような親子になりたいと思い、涙が止まりませんでした」といった感想が寄せられました。

霊肉合同作戦で1000人に感動届ける

福島家庭教会が盛大にクリスマス・ファミリーフェスティバル

①

②

③

④

①ハンドベルの演奏
②講演する佐々木一成本部伝道教育部長
③迫力ある太鼓の演奏
④盛大に行われたフェスティバル

12月13日、福島家庭教会が福島市内の会場で「クリスマス・ファミリーフェスティバル（FF）」を開催しました。昨年に続き今回が2回目となったクリスマスFF。食口一人ひとりが精誠を捧げ、教会が一丸となって取り組んだ結果、国会議員や地方議員などゲスト600人余りを含む約1000人が集まる盛大なイベントとなりました。

一つの教会で企画したクリスマスFFは、動員の過程において様々な天の導きがありましたが、実際の準備においてもこの期間、壮年部や婦人部をはじめ、青年部や中高生までも協力。当日も、朝から70人近い食口が集まり、会場の準備を行いました。

午後1時に開幕したクリスマスFFは、郡山家庭教会の友情出演による素敵な合唱からスタート。引き続き、佐々木一成本部伝道教育部長が、「家族の大切さ」のテーマに沿って感動的な講話を行いました。ゲストとして参加した祝福二世の学校の担任教諭は「家族を大切にする教え『愛されたいと思うより、愛する人になる』という言葉は、その通りだと思います」と共感。別のゲストは「感動しました。娘にも聞いてもらいたい内容です」「結婚の大切さを痛感しました」といった感想を寄せています。第二部のエンターテイメントでは、創作和太鼓「鼓逢」による迫力ある太鼓の演奏に、参加者たちは感動。福島家庭教会の“3大歌手”による歌謡ショーのあと、教会のイベント教室「フラダンスを楽しむ会」のメンバーがフラダンスを披露、青年部がハンドベルの音色でクリスマスの雰囲気を演出しました。また、教会のサークル活動「H-oPE」によるダンスでは、多くのゲストが若者たちがひた向きに踊る姿に心打たれました。

最後は、抽選会を行い、クリスマスFFは幕を閉じました。参加したゲストたちからは、次のような感想が聞かれました。

「佐々木先生のお話が感動しました。生きがいを感じました」

「教会の集まりに行きたいと思っていました。今回は子供たちと一緒に来て、子供も喜んでくれたので私も嬉しいです」

「会場が、本当に良い雰囲気でした」

「1000人を集めるのは簡単じゃありません。よくこんなに大勢の人が集まったと思います」

霊肉合同作戦――地上にいる我々が一つになり、お互いが愛し助けあって良い関係をつくることで、その良い影響が周囲の多くの人に及び、さらに輪が広がっていきます。クリスマスFFを通して、福島家庭教会の食口たちは、神様と霊界の役事をたくさん体験することができました。

日韓の小学生がサッカーを通じ親善交流

第11回ピースカップジュニア東日本大会

①

②

③

④

①大会の参加者
②白熱した決勝戦
③入賞チームの選手たち
④サムルノリの公演

12月12、13日の2日間にわたって、東日本地域の小学生サッカーチームが参加する「第11回ピースカップジュニア東日本大会」が茨城県神栖（かみす）市のサッカー会場で開催され、韓国の1チームを含む計16チームの選手192人とコーチ、審判のほか、応援に駆け付けた父兄など総勢400人が集まりました。

今回の大会は、韓国から麗水清海（ヨスチョンヘ）FCが特別参加し、サッカーを通じて日韓の子供たちが親善交流する機会に。一方、韓国チームの技術レベルの高さに、日本チームも刺激を受け、ゲームは白熱した戦いとなりました。

韓国チームは、韓国家庭連合が国際家庭を支援する「多文化プロジェクト」の一貫としてサッカーチームを編成。韓日祝福家庭の子女だけでなく、中国、フィリピン、モンゴル等の一般の国際家庭の子女も含めた17人のパワフルなチームでした。

また、孫炳浩（ソンピョンホ）「多文化総合福祉センター」理事長を始めとする役員、スタッフ、父母8人とともに、支援団体として韓国の伝統楽器4種を用いた演奏「サムルノリ」の公演団8人も来日。開会式と夜の集会では、サムルノリの公演が披露され、大会に花を添えました。

大会1日目は、16チームが4グループに分かれて予選リーグ戦を実施。2日目は予選リーグ各組上位2チームによる決勝トーナメントと、各組3、4位による順位決定トーナメントを行いました。

夕食後の集会では、じゃんけんによる抽選会や、各チームのキャプテンと監督が登壇してチームを紹介。その中で、川崎誠和SCの監督は「今日対戦した麗水清海FCの圧倒的な強さとパワーの大きさを感じました。これが世界のサッカーだとチームのメンバーも衝撃を受けています。明日、上位を目指して決勝で麗水清海FCと再び対戦できるよう頑張ります」と語りました。

決勝戦は、そのごとくに麗水清海FCと川崎誠和CSとの再戦となり、最後まで白熱した試合展開に。最後は、麗水清海FCが終了間際、残り1分で決勝のゴールをきめ、初参加で初優勝に輝きました。

3位決定戦では、北東京ランスピリッツが南東京ファイターズに2対0で勝利し、準決勝で戦った麗水清海FCが勝利を称えるなど、日韓の友情も深まりました。

5位の長野チョンソンFC、6位の宇都宮ウィングまで賞状が授与され、長野チョンソンFCのN・M君が12点で得点王になりました。

初日は快晴の天候で始まり、2日目は午前中、小雨でしたが、閉会式には雨が上がり、大会を祝福するかのような大きな虹が空を彩りました。

今大会を契機に、日本家庭連合の小学生サッカーはレベルアップを触発されるとともに、サッカーを通じた新たな日韓親善交流がスタートしました。